



日本行動計量学会事務局  
〒106-8569  
東京都港区南麻布 4-6-7  
統計数理研究所 馬場研究室内  
Tel 03-5421-8739 (直通)  
Fax 03-5421-8796

## 日本行動計量学会第 33 回大会を終えて

植野真臣 長岡技術科学大学

本年、8月26日から29日にかけて、長岡技術科学大学において日本行動計量学会第33回大会を開催させていただきました。交通の不便さ、また震災直後の開催であったということで、客足が遠のくのではと心配しておりましたが、予想を大きく上回り、本大会における、発表件数140件、全参加者は430人と盛会に終わりました。これも多くの会員の皆様のご協力とご参加を得たことによるものと大会実行委員会を代表して皆様方に感謝いたします。

また、今回、大会実行委員会を外部メンバによる企画委員会（プログラム委員会）と開催校メンバによる開催校準備委員会の二つに分離して組織することにより、開催校の実行委員の負担軽減、開催校の一部の実行委員による企画の偏りの回避、等の利点を狙いましたが、かなり成功したと実感しております。今後とも、実行委員会では是非ともこのようなやり方を検討していただければと思います。また、内容的には、大会テーマを「知識社会におけるデータ・サイエンス」とし、知識創造時代という新しい時代に行動計量学が社会的リーダーシップを取れることを目標として設定しました。そして、基調講演には、元 ASA 会長、ISBA（国際ベジアン会議）会長で世界的に有名な Zellner 氏、データ解析の第一人者 Press 氏、世界的な先端知能ロボットの第一人者石黒氏にお願いし、すばらしい講演をしていただきましたし、シンポジウム「因果は本当に証明できるのか？」では統計学だけでなく、哲学や AI などの立場から因果についての考察、活発な議論を行い、たくさんの聴講者がいらしていただきました。また、企画委員会が企画する特別セッションについても、特にデータマイニング、テキストマイニング、知識マネジメントを中心に企画委員会で設定し、多くの非会員の方がいらしていただきました。人工知能学会の基礎問題研究会、ベジアンネットワークセミナーを同時開催することにより、多くの非会員の方々にも当学会に参加していただきました。

経営学の巨人 P.F ドラッガー（2002）によれば、

企業組織で開発された企業のコア・コンピテンシーとなった新技術のほとんどが本来の開発者の意図と異なることが多いそうです。また、それらの技術が成功したかどうかは、技術的先端性とはほぼ無関係で、むしろ組織の持つマーケティング力に依存してきたそうでもあります。たとえば、10年前にある研究者が開発した技術を全く違う使い方で市場に出すということは非常に多いことらしいのです。この意味で、結局、組織にとっては超先端的な技術を開発することよりも、マーケット分析力と新規マーケット開発力を磨くほうが重要ということになります。また、産業革命後のイギリスの没落は、当時新しく出現したテクノロジストを職工としてさげすみ、依然として物理学や数学のみを理工系の学問として取り扱ってきた新しい文化を受け入れる社会がなかったためであると考えられています。当時のイギリスの失敗を繰り返さないためには、伝統的でない新しいものを受け入れる文化を持っているかどうかがキーです。いや、受け入れるだけでなく、そのマーケットを開拓していくべきでもあります。今日の知識創造時代における本会の重要性はますます増加していますが、まさに本学会の立場も先の状況に非常に似ていると考えられ、学会の役割はただ各会員の行った研究流通にとどまらず、潜在的な社会的インパクトを見抜き伝統的でない新しい考え方を受け入れ、その研究マーケットをそれぞれ開拓していくといった文化が学会に根付いていくことがまず重要であると考えられます。その意味で、全国大会の果たす役割は重いと考えられます。全国大会を学会の方向性を決定するマネジメントと考えています。今後、是非とも、行動計量学の中から出現したという新しい技術、手法等を組織的に育てていってほしいと思います。

最後になりましたが、本会開催のためにご尽力いただいた実行委員会の委員の皆様と学生スタッフの皆様方に心より感謝いたします。



## 学会賞を受賞して

### 林賞を受賞して林先生を偲ぶ

龍ヶ崎済生会病院  
久保武士

敬愛する林先生の名を冠した賞を頂き光栄の至りです。

私は先生の高弟でも愛弟子でもありませんが、御存命中色々な機会に訾訾に接しよく「強い印象」を受けました。

従って先生が亡くなられた時の「偲ぶ会」にはどうしても参加したかったのですが、出席が叶わずひどく無念でした。

その席では、お弟子さん達が先生の偉業や御人柄について多くを語られたに違いありません。出来る事なら今でもその時の話を拝聴したい気持ちで一杯です。同じことを話された方もおられるかもしれませんが私にも一言この機会に先生の「強い印象」について記させていただきます。

先生のお話を伺っているといつも「ハット」する事があるのです。いつ聴いても同じ話を聴いても必ずそのような一瞬があるのです。先生のお話は講演でも個人的な話でも聴いていて退屈する事はありませんでした。林先生の身近に居られて何時も先生に接しておられた方は、或いは違った印象をお持ちかもしれません。しかし私は先生の講演だったら何度でも聴きたいと思いました。

私には過去に非常によく似た印象の先生がもう一人居ます。恩師の故K教授です。今の皇太子殿下のお産を扱った方ですが手術の名手でもありました。教授の手術助手を務めることは緊張を要して楽しい仕事ではないのですが、助手を務めるといつも何かハットする発見があるのです。

それも癌の手術のような大手術でなくありふれた子宮筋腫のような手術でも、いつも何かハットさせられ教わる事がありました。さり気ない操作や所作の裏に細かい気配りや注意が秘められていました。

林先生の片言隻句にも第一級の研究者だけが持つ etwas が含まれていたと思います。借り物の損料着でない御自身の思索から得たものに付いてのお話で、人の心を打つのは当然だったのかもしれませんが。

色々な意味で dirty な data を前にしてその背後に潜むもの、核心に迫ろうとする先生の気迫と洞察力には圧倒される思いがしていました。

臨床医学は夫々信頼度が異なる混沌としたデータ群と格闘するプロセスです。行動計量学的なアクセスが一番求められる領域の一つだと思います。

近年医学領域では EBM (evidence - based medicine) や RCT (randomized controlled trial) 等が取り沙汰されていますが集団に対する分析結果とそれを構成する一患者との関連は林先生が注意を喚起されていたように注意深い考察が必要だと改めて痛感しています。

御健在でしたら、まだまだ御教え頂く事が沢山あったのにと残念です。

林先生を鼻祖とする行動計量学がその衣鉢を継ぐ優れたお弟子さんたちによって飛躍的に発展する事をお祈りして受賞の御礼の言葉とさせていただきます。

### プリスク립ティブ・アプローチ (処方的研究) について

東京工業大学 藤井 聡

筆者が人間の行動を対象とした研究を始めたおり、いわゆる行動科学は「記述的 (descriptive) 行動研究」と「規範的 (normative) 行動研究」の二つに分けられるものと漠然と認識していた。

ここに、記述的行動研究とは“人々の行動は、どのようなになっているのか？”という問いに答えるための研究であり、心理学的行動研究がその例として挙げられる。

一方、規範的行動研究とは、“人々の行動は、どのようなあるべきなのか？”という問いに答えるための研究であり、“合理性”の概念を軸としつつ、主として数学を援用しながら議論を重ねる経済学的行動研究がその例として挙げられる。

しかしその後、これら以外に「処方的 (prescriptive) 行動研究」なる研究アプローチがあるということを知った。処方的行動研究は“人々の行動があるべき姿に近づくために、いかにすべきなのか？”という問いを考える研究であり、主として「工学」の分野にて取り扱われていた。

当時、筆者は行動研究の王道はやはり「記述」と「規範」であり、処方的研究はどちらかといえば「おまけ」の様なものではないかと漠然と理解していた。なぜなら、処方的行動研究では、記述的行動研究が目指す「人間行動についての深い理解」も、規

範的行動研究が目指す「行動に関わる矛盾無き論理体系の構築」も達成できないものであり、それ故に、どちらかと言えば退屈な研究に思えたからである。

ところが、ここ最近、哲学の人達を交えながら処方的行動研究について議論する機会に何度か恵まれたのだが、その議論を通じて、筆者の処方的行動研究に対する認識が、180度異なったものとなった。

その議論の中で、ある哲学者が次のように発言した。「世界がどのようになっているのかを考えるものが哲学である。ただし、その問題に、いかに生きるべきかという問題を重ね合わせて考えるところに、哲学の最大の特徴がある。それはなぜかと問われても、答えようがない。哲学とはその様なものとして生まれ、そして、引き継がれてきたものなのである」。

筆者はこの説明を聞いた時に多大なる衝撃を受けた。哲学とは、とどのつまり「いかに生きるべきか」を考えるものだったのである。無論、100人の哲学者がいれば100通りの哲学の定義があるのだろう。しかしよく良く考えてみれば、確かに、最も正統なる哲学の系譜の中で、「いかに生きるべきか」という問いが中心に据えられていたことはどうやら間違いないさそうに思えるのである。

いかに生きるべきか。この問いは、「記述的」な問いでも、「規範的」な問いでもない。それは、紛う事なき「処方的」な問いである。つまりは、哲学の伝統は、「記述」でも「規範」でも無く、「処方」にあったのである。

ただし、「いかに生きるべきか」を考えるためには、人間とはいかなるものなのかという「記述的」な問いに答えなければならない。さらには、目標としての理想の生き方とは何かという「規範的」な問いにも答えなければならない。そうした記述的な問いと規範的な問いの両者を深く理解した時に初めて、いかに「生きるべきか」という処方的問いに答える準備が整うのである。

筆者はこの様に理解して以来、行動科学研究における処方的研究の重要性を改めて強く感じる様になった。処方的研究の立場をとることではじめて、人間の行動を深く、かつ、多面的に捉えることができるのではないかと思えるようになったのである。

確かに、一面において、我々の行動は数式で表現できる。しかし、鳥や虫の声を聞きながら、数式では表現し得ぬえも言えぬ幸せな気分に入る時もある。その一方で、全く感情にまかせて行動しているようでも、結局は特定の数式に従っているかの様に行動していることもある。人間がそうした合理的なのか非合理的なのかよく分からない両義的な存在である以上、単一の視点のみで行動科学を進めることは、極めて「非科学的」なアプローチなのであろう。記述的に「生身の人間」を理解しつつ、規範的

な「良き生き方」の実現を目指す。そうした処方的行動研究を重ねたときにはじめて、人間存在に関する全的な理解が、少しずつ深められていくように思えるのである。

追記：この度、本記事を書かせていただくこととなりましたのは、林知己夫賞（優秀賞）を頂戴したことが直接の契機でありました。この度の機会を与えて頂いた学会の皆様、ならびに、受賞研究の協同研究者の早稲田大学・竹村和久教授に深謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

## 奨励賞を受賞して

森本 栄一

この度は、思いがけず栄誉ある学会奨励賞に選んで頂きまして、大変ありがとうございます。岩坪先生より受賞のご連絡を頂きました際には驚きと感激とともに、本当に自分が貰っていいものか戸惑いを覚えました。が、「戦後日本の統計学の発達—数量化理論の形成と定着へ」に関して書きました和文誌の論文を評価して頂いた旨のお言葉を頂き、今後のより一層の努力を誓って賞をお受け致しました。

振り返ってみれば、大学院生時代初めて数量化理論に接して以来、その成り立ちに興味を持ち、その後幸運にも林知己夫先生からご指導を頂くことが出来たお陰であると天国の先生に深く感謝しております。また林先生と共に、先生の研究会であった「林塾」「データサイエンス研究会」などに参加させて頂き、岩坪先生を始め、丸山先生、林篤裕先生、その他多くの諸先生方にご指導頂いた賜物であると深く感謝申し上げます。

昨年は、編集委員の先生方と共に林知己夫先生の著作集を刊行することが出来ました。この著作集を始め、林先生の思想を伝えるべく、頑張りたく思っておりますので、今後とも何卒ご指導ご鞭撻を頂けます様、よろしくお願い申し上げます。

最後に、統計数理研究所で初めて数量化理論に接するきっかけを与えて頂き、今年8月に余りにも突然にご逝去された駒澤勉先生に感謝申し上げますと共に、先生のご冥福をお祈り申し上げます。





## 役員（理事・監事）選挙実施の

## お知らせ

## 選挙管理委員会

会則第 12 条の規定に基づき、役員（理事および監事）の選挙を行います。選出される役員の任期は 2006（平成 18）年 4 月 1 日から 3 年間です。今後の学会運営を担う会員を選出する重要な選挙です。有権者の方は確実にご投票下さるようお願い致します。

投票締切：2006 年 1 月 13 日（金）、当日消印有効  
選挙人および被選挙人（有権者）：2005 年 4 月 1 日現在正会員またはシニア会員で、2005 年 11 月 30 日現在ひき続き正会員またはシニア会員であるもの（2005 年 4 月 2 日以降に入会した正会員と、4 月 2 日以降に準会員から正会員への種別変更のあった会員を除く）

実施詳細は別紙による実施要領を参照下さい。  
有権者には選挙関係の下記の書類が各 1 点同封されていますのでご確認下さい。

- ・役員選挙実施要領
- ・選挙人および被選挙人名簿
- ・投票用紙
- ・投票用紙封入用小封筒
- ・返信用封筒

なお、書類の不備、封入漏れなどに気付かれた場合は、選挙管理委員会へ至急ご連絡をお願い致します。

選挙管理委員会：

林 文（委員長）・前田忠彦・森本栄一

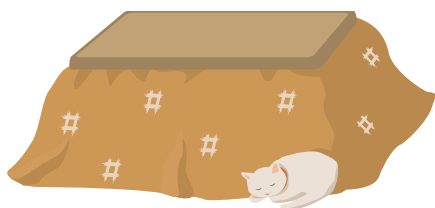
連絡先：〒 106-8569 東京都港区南麻布 4-6-7

統計数理研究所 前田研究室内

日本行動計量学会 選挙管理委員会

Tel & Fax: 03-5421-8734

E-mail: maeda@ism.ac.jp



## 日本学術会議の報告

柳川 堯

第 19 期日本学術会議第 4 部会員

久留米大学バイオ統計センター

私ども第 19 期学術会議会員は 9 月末日で辞任し、10 月 1 日から新しい体制の日本学術会議が発足した。新しい日本学術会議の会員は、30 名の委員からなる選考委員会によって選出された。第 2 回目以降は学術会議会員の推薦によって選出される（cooptation）ことになっている。新学術会議会員の名簿は学術会議の次のホームページに与えられている。（<http://www.scj.go.jp/ja/info/member/index.html>）

統計科学関係の新会員の名は見られない。従来第 3 部に設置されていた経済統計研究連絡委員会関連の新会員もゼロのようである。日本学術会議発足以来こんなことは初めてである。ショックである。第 19 期統計学研究連絡委員会は、このような事態が生じないように危機感を持ち最大の尽力を行った積りであるが、このような結果となり統計関連学会の研究者諸氏に力不足をお詫びするとともに恥じ入るところ多大である。統計関連学会から次期会員が必ず選出されるように、連合の力をより一層強く結集させて諸活動に高い成果を挙げていただくよう切にお願いしたい。

統計学連絡委員会は、以下のような引継ぎ事項を「遺言」として残すこととした。新しい学術会議の体制では、統計学研究連絡委員会は消滅するが連携会員は必ず統計科学分野から選出され、統計学研究連絡委員会が行ってきた活動を継続・発展する力になっていただけるものと確信するからである。

ところで、私どもの「遺言」は 2 通ある。他の 1 通は対外報告「知識創造社会に向けた統計教育の推進について」である。これは、平成 10 年度の学習指導要領で義務教育レベルで統計関連の単元が大幅削減されたことに対して、時代の方向性に合わないことを指摘した上で「問題解決能力・問題探求能力の育成を目指したデータ処理と確率」教育を義務教育の中で重視し、世界をリード出来る人材養成に比重を高めることが重要であるという観点から提言を行ったものである。報告書全文は以下の HP から入手できるので、ぜひ読んでいただきたい。（<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-19-t1031-10.pdf>）本対外報告書は、官房長はじめ文部科学省の関係者および中央教育委員会の会長・副会長に送付した。なお、本報告書は、日本統計学会統計教育分科会が主体となって作成し関係官庁関係者に提出した要望書をバックアップすることを目的としている。渡辺美智子さんがそのリエイゾンとして果たした役割は

大きい。感謝したい。また、学術会議報告は私見を交えた拙いものにすぎなかったが、多くの読者から暖かいご支援と助言をいただいた。深く感謝いたします。

### 統計学研究連絡委員会 引き継ぎ事項

平成 17 年 9 月 12 日  
統計学研究連絡委員会委員長 柳川 堯

統計学研究連絡委員会は、主に次のような活動を行ってきた。

- ・ 勧告
  - ・ 統計学の大学院研究教育体制の改善について（勧告）（昭和 58 年 11 月）
- ・ 対外報告
  - ・ 統計学研究教育体制の整備のための具体的方策について（平成 2 年 12 月）
  - ・ 知識創造社会に向けた統計教育の推進について（平成 17 年 7 月）
- ・ 公開講演会・シンポジウム
  - ・ シンポジウム「大学教育における統計学」（平成 5 年 11 月 4 日）
  - ・ 公開講演会「地球環境の統計」（平成 6 年 4 月 20 日）
  - ・ 公開講演会「統計の教育体制—その国際的展望—」（平成 8 年 1 月 26 日）
  - ・ シンポジウム「21世紀に向けての統計科学の課題と方向—新しいパラダイムの構築」（平成 11 年 7 月 31 日）
  - ・ シンポジウム「事例中心に見る統計科学の現代的価値」（平成 16 年 9 月 3 日）
  - ・ シンポジウム「統計科学の現代的価値」（平成 17 年 9 月 13 日）

新しい体制の下で10月1日より発足する日本学術会議では、連絡委員会が解消され課題別委員会と分野別委員会の設立が予定されている。わが国における統計科学の研究教育が日本学術会議の新体制の下で円滑に振興・発展することを願う統計学研究連絡委員会は、以下の二点を引き継ぎ事項として書き残すこととした。

1. 日本学術会議ホームページに掲載されている、日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会による「日本学術会議の新しい体制の在り方～新体制の円滑な発足のための提案～」の項目IV-6設置すべき分野別委員会（案）において、統計学は「数学分野別委員会」に入っている。

統計学は、人文科学、社会科学、自然科学のあらゆる分野における数量的理解の基盤として、人文科

学、理工学、生命科学のいずれとも密接に関連した複合分野の学問である。数学に密接に関連した数理統計学だけが統計学ではない。このような統計学を「数学」という分野に限定することは、統計学の健全な発展を阻害する可能性がある。私たちは懸念する。そこで、1. 複合分野を正当に評価した分野別委員会の設置の実現、2. 現提案について根本的な変更が難しい場合は、少なくとも「数学」分野別委員会の名を「数理科学」分野別委員会に変更していただきたいこと。

2. また、International Statistical Institute等、統計科学に関連する国際学会の国内対応組織の構築を統計学研究連絡委員会で進めてきたが、まだ実現化されていない。この実現化をはかること。

以上

注意）上記「新体制の円滑な発足のための提案」は日本学術会議のホームページ <http://www.scj.go.jp/ja/scj/kondan/giji10.html> に記載されています。



## 第9回春の合宿セミナーのお知らせ

このたび、第9回日本行動計量学会春の合宿セミナーを同志社大学文化情報学部でお世話をさせていただきますことになりました。今回も昨年と同様、合宿という形をとらずに開催させていただくことになります。合宿を期待しておられた諸氏には申し訳ありません。企画内容の関係でどうしても大学の施設を利用する必要がでてきたための判断です。

内容につきましては、合宿セミナーの本来の趣旨に沿うよう、初心者の方がはじめてから学べる内容となるようにし、計算機実習室を利用した実習形式のセミナーもご用意いたしました。前回のSASに引き続き、今回はSPSS、S-plusというメジャーな統計ソフトを利用したセミナーです。また、社会調査の最近の話題、日本分類学会との共同セミナーなど盛りだくさんな内容となっています。

同志社大学京田辺キャンパスは、京都、大阪、奈良の中心に位置し、どこからでもアクセスできる環境にあります。たくさんの方々のご参加をお待ちいたしております。

日時：2006年3月16日（木）～3月18日（土）

場所：同志社大学 京田辺キャンパス

〒610-0394 京都府京田辺市多々羅都谷1-3

(<http://www.doshisha.ac.jp/daigaku/koutsuu/noflash/index.html>)

定員：データ解析実習関係は、実習形式のため80名です。他はありません。

参加費：会員学生3,000円、非会員学生4,000円、会員一般6,000円、非会員一般10,000円

懇親会：3月16日（木）に懇親会を予定しております。詳しくは下記Webページをご覧ください。

宿泊：各自でご用意ください。

参加申し込み：実習形式のセミナーもありますので、必ず下記Webページより参加申し込み手続きを行ってください。

主催：日本行動計量学会運営委員会

共催：日本分類学会、同志社大学文化情報学部

問い合わせ先：企画担当 宿久 洋（同志社大学）

[hyadohis@mail.doshisha.ac.jp](mailto:hyadohis@mail.doshisha.ac.jp)

セミナーのタイトル及び講師（詳細は案内およびHPを参照ください）

- 社会調査の最前線ー世論調査ー  
講師：鈴木督久（日経リサーチ）
- 社会調査の最前線ー選挙予測調査ー  
講師：鈴木督久（日経リサーチ）
- 社会調査の最前線ー国際比較調査ー  
講師：鄭 躍軍（総合地球環境研究所）
- クラスタリング手法の理論と応用I～IV  
講師：岡太彬訓（立教大学）、山口和範（立教大学）、他
- S-plus 入門（実習形式）  
講師：山本義郎（東海大学）
- Visual Mining Studioによるデータマイニング入門（実習形式）  
講師：山本義郎（東海大学）
- Text Mining Studioによるテキストマイニング入門（実習形式）  
講師：金 明哲（同志社大学）
- SPSS 入門（実習形式）  
講師：酒井麻衣子（多摩大学）
- SPSSによる多変量解析Iー回帰分析ー（実習形式）  
講師：酒井麻衣子（多摩大学）
- SPSSによる多変量解析Iークラスター分析ー（実習形式）  
講師：酒井麻衣子（多摩大学）
- SPSSによる多変量解析Iー因子分析ー（実習形式）  
講師：酒井麻衣子（多摩大学）

セミナーの詳細、参加申し込み手続きは、<http://www.cis.doshisha.ac.jp/stat/bsj06/> をご覧ください。



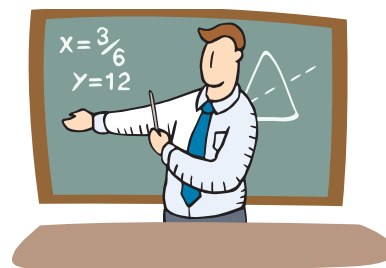
## 研究部会募集

日本行動計量学会では、研究活動の活性化をはかるため、研究部会を設け、活動経費の助成を行っています。研究部会には、一定地域での研究推進活動や研究普及活動を主な目的とする地域部会、および、オリジナリティーに富んだ研究成果を挙げることを目的とする研究グループがあります。活動経費は、地域部会については1部会上限5万円程度、研究グループは1部会5万円（採択件数は優れた研究計画若干）です。地域部会については、都心部から東京近郊までを主たる活動地域とする部会を考えておりません。平成18年度の研究部会の募集を下記要領で行います。なお、採否の審査結果は、4月初旬にお知らせする予定です。

### 応募要領：

- ・提出書類
  - (1) 地域部会：研究部会名、代表者、参加予定者（会員、非会員別）、助成希望金額、活動予定（この順序で A4 判用紙を使用して書くこと）
  - (2) 研究グループ：研究部会名、代表者、参加予定者（会員、非会員別）、研究計画、活動予定（この順序で A4 判用紙を使用して書くこと）
- ・応募締切：平成 18 年 1 月 20 日（金）必着
- ・郵送先：〒 351-0197 埼玉県和光市南 2 丁目 3-6  
国立保健医療科学院技術評価部  
日本行動計量学会運営委員会委員長  
山岡和枝
- ・問い合わせ先：山岡（TEL: 048-458-6223）または  
e-mail: yamaoka@niph.go.jp  
をお願いします。

なお、研究部会に関する規約は WEB (<http://www.soc.nii.ac.jp/bsj/bukai.pdf>) をご参照ください。



## 2005 年度 チュートリアルセミナー報告

立教大学 山口和範

日本行動計量学会第 33 回大会の初日に下記のチュートリアルセミナーが開催されました。

講師: Wolfgang Gaul 教授 (University of Karlsruhe)

題目: WEB MINING & e-INTELLIGENCE

日時: 8 月 26 日 13:00 ~ 17:00

会場: 長岡技術科学大学

マルチメディアシステムセンター

タイトルにあるようにインターネットサイトに関するアクセスに関するマイニング手法に関するセミナーで、様々な具体的な事例が盛り込まれていました。インターネットの普及に伴い、データや情報の利用は飛躍的に増加しました。セミナーでは、リコメンダーシステム（アクセスログから得たお勧め情報をインターネットの利用者と Web site の運営者の提供する）についての解説から始められ、得られたデータや情報の処理や分析について、講演者自身の開発したアルゴリズム（ファジー 2 相クラスタリング、欠測値の処理等）の紹介とその応用もありました。個人的には、ロボットによるアクセスを分離する方法論、理論とともにその必要性に関する部分に大変興味をひかれました。

英語での講演でしたが、岡太教授（立教大学）の解説もあり、多くの質問も出され、活発なセミナーとなりました。なお、参加者は 31 名（会員 22 名、協賛学会会員 8 名、非会員 1 名）でした。

最後になりましたが、会場の準備など長岡技術科学大学の方々には大変世話になりました。感謝申し上げます。



## 第85回行動計量シンポジウム 社会調査と社会調査士

「社会調査と社会調査士」のテーマで、第85回行動計量シンポジウムを開催した。本シンポジウムは、2002年度から日本行動計量学会の地域部会として活動している「行動計量学 岡山地域部会」が企画し、岡山理科大学地域分析研究会と岡山統計研究会との共催で行った。

本シンポジウムは、a)「社会調査士資格」の設立側の代表者、b)「社会調査」を実際に仕事としている実務者、c)「社会調査士」を育てるべき大学の教育者の三者それぞれの立場から、設立のねらいや現場からの要求、教育での問題点などを出し合い、社会調査士をどのように育てていくかを明らかにするために企画されたものである。

シンポジウムの前半では、a)を代表して、

- ・直井 優（認定機構事務局長、大阪大学・人間科学部）「社会調査士資格制度の大学における導入」
- ・岡太彬訓（科目認定委員会副委員長、立教大学・社会学部）「日本行動計量学会と社会調査士資格」

b)を代表して、

- ・鈴木督久（株式会社日経リサーチ）「職業資格の制度化は、誰に如何なる利益をもたらすか」
- ・青木 恵（岡山情報文化研究所）「ローカルにおけるリサーチの現状と求められるスキル」

の各講演をいただいた（講演内容の概要は、本シンポジウムのWebページで見ることができる）。

後半は、c)の代表者として、岡山県の認定科目設置大学である全5大学から、

- 藤井和佐（岡山大学・文学部）
- 田中 潔（岡山商科大学・商学部）
- 森 裕一（岡山理科大学・総合情報学部）
- 轡田竜蔵（吉備国際大学・社会学部）
- 中山ちなみ（ノートルダム清心女子大学・文学部）

司会：垂水共之（岡山大学・環境理工学部）が登壇し、a)、b)とともに、

1. 導入の経緯
2. 教育の実際と工夫
3. 導入後の変化
4. 資格そのものの検討
5. 今後のあり方（認定機構への要望も含む）

の5つの観点でパネルディスカッションを行った。議論の進行は、上の5つの観点に準じて事前に実施されたアンケートの回答を基にして行われた。アンケートには、登壇者である岡山県下5大学に加え、県

外の4大学からも協力をいただいた（回答の全文は、本シンポジウムのWebページに掲載している）。

議論も多岐にわたり、全体の雰囲気も大変よく、この紙面で伝えきれないほど、得ることの多いシンポジウムであったというのが、企画者であり参加者でもあった者の感想である。その具体的な知見のいくつかについて、以下にまとめておく。

前半の基調講演では、a)の代表からは、認定機構の設立の背景だけでなく、資格の将来計画や具体的な審査基準の詳細が話されたこと、また、b)の代表からは、調査を実際に業務としている立場から「社会調査士」としてどのような専門性が必要か、どのようなことに対処する力が必要かについて、目の前の具体的な実践例に基づいて示唆されたことが、特筆すべき点である。

後半のパネルディスカッションでは、各大学の資格導入経緯から、実際に教育し始めて変化したことや直面する問題点などが出され、既に導入している大学やこれから導入を考えている大学の両者にとって、非常に参考になった。たとえば、資格の導入にともない、統計専用パッケージなど環境整備を積極的に行った大学があること、認定機構の標準カリキュラムに大学独自の基準を加えて運用している大学があること、学生募集の1つの策としての導入であったが、学内の認識や教員の意識に変化が見られたことなどが特徴的であった。資格制度そのものに関しては、認定機構とのやり取りの中で、たとえば、カリキュラム内の質的調査と量的調査の取扱量の差に対して、社会調査の現状を考慮し、6:4程度で量的調査にウエイトを置いていることや、将来的に統一試験になるかどうかについては、学部レベルの資格としては、科目認定の方式を変更する予定がないことなども明らかになった。また、社会調査士の世間での認知度や資格の普及にあたって議論がおよび、学んだことを活かす工夫（たとえば、卒業研究の活用）や「調査」や「統計」を市民が親しみをもつような工夫が大切であるといった意見が出された。フロアからも、「実習授業」に苦勞している各大学の現状を踏まえ、調査会社でインターンシップを行うような形でお互い協力できるのでないかといったアイデアも出された。

全体を通じて、資格取得が目的となり本来の社会調査の教育がおろそかにならないようにしたい、この資格がもっと市民権を得るように努力をしていきたいといった思いが議論の根底に流れていたように思う。

シンポジウム後には、社会調査士の導入を考えている参加者が個別に質問をしたり、その後の懇親会でも、大学同士、あるいは大学と調査会社との協力に話がおよんだりするなど、今後へ向けて大きな1歩を踏み出すことのできた会であった。



100 名を超える方々のご参加をいただき、登壇者にとっても参加者にとっても大変有意義なシンポジウムとなった。ここに感謝の意を表し、御礼に代えたい。

本シンポジウムの Web ページは、しばらく公開しておくので、必要に応じて、参照されたい。

[http://mo161.soci.ous.ac.jp/bsj\\_okayama/85/](http://mo161.soci.ous.ac.jp/bsj_okayama/85/)

また、当日の資料などについては、森 (mori@soci.ous.ac.jp) まで、問い合わせられたい。

### 第 85 回行動計量シンポジウム コーディネーター 垂水共之・田中 潔・森 裕一

## 第 34 回日本行動計量学会大会

日時：2006 年 9 月 11 日（月）～ 14 日（木）

場所：聖学院大学

最寄り駅、JR 高崎線、上野一宮原（30 分）

JR 埼京線、新宿一日進（35 分）

JR 快速湘南新宿ライン、藤沢一宮原（37 分）

宮原駅より 15 分おきに聖学院大学のスクールバスが発車している。

9 月 11 日（月）のチュートリアル・セミナーのテーマは未定。

第 34 回大会実行委員長  
聖学院大学人間福祉学部 丸山久美子



## 関連学会等カレンダー

※注意：本コーナーの情報は、幅広い専門分野にわたる会員の皆さまに、なるべく多くの催し物の存在をお知らせするために編集担当側で収集・要約したものです。プログラムや参加方法については、必ず各催事末尾に掲載の「照会先」にご確認下さい。

### <学協会大会等>

#### ☆ 日本分類学会第 22 回研究報告会

会 期：2005 年 12 月 6 日（火）10 時 00 分～17 時 30 分

会 場：立教大学 池袋キャンパス  
セントポールズ会館 2F

報告会参加費（含報告集代）：

会員・非会員を問わず 1500 円

照会先：第 22 回研究報告会実行委員会

立教大学社会学部 助手室（担当：河野康成）

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

Tel: 03-3985-2297, Fax: 03-3985-2833

URL: <http://www.ir.rikkyo.ac.jp/~jcs2005/index.htm>

#### ☆ 第 41 回数理社会学会大会（創立 20 周年記念大会）

会 期：2006 年 3 月 3 日（金）、4 日（土）

会 場：東京大学

照会先：数理社会学会研究事務局

（数理社会学会研究理事 土場 学）

〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1

東京工業大学大学院社会理工学研究科

Tel & Fax: 03-5734-3192

E-mail: [jams@soc.titech.ac.jp](mailto:jams@soc.titech.ac.jp)

URL: <http://www.soc.titech.ac.jp/~doba/jams.htm>

#### ☆ 日本オペレーションズ・リサーチ学会

##### 2006 年春季研究発表会

会 期：2006 年 3 月 14 日（火）、15 日（水）

会 場：中央大学（後楽園キャンパス）

実行委員長：田口 東（中央大学理工学部）

特別テーマ：モデリング

特別講演（特別セッション）：3 月 14 日午後

講師：伊理正夫（東京大学名誉教授）、飯田裕康（労働科学研究所）、滝根哲哉（大阪大学）、赤池弘次（統計数理研究所名誉教授）

照会先：

社団法人日本オペレーションズ・リサーチ学会

〒113-0032 東京都文京区弥生 2-4-16

学会センタービル 3F

E-mail: [jimukyoku@orsj.or.jp](mailto:jimukyoku@orsj.or.jp)

Tel: 03-3815-3351（代）、Fax: 03-3815-3352

URL: <http://www.ise.chuo-u.ac.jp/or2006s/index.html>

## &lt;シンポジウム・研究集会等&gt;

## ☆ 日本オペレーションズ・リサーチ学会

## 第 55 回シンポジウム

会 期：2006 年 3 月 13 日（月）

会 場：中央大学（後楽園キャンパス）

実行委員長：加藤直樹（京都大学）

テーマ：データ解析の最前線（マーケティング、金融、生産管理等の分野におけるデータ分析に焦点を当てて、ORの技術が現実活かされているということをお話いただける方々の講演）

講師（敬称略）：鷲尾 隆（大阪大学）、小野 潔（UFJ 銀行）、大澤幸生（東京大学）、矢田勝俊（関西大学）

照会先：

社団法人日本オペレーションズ・リサーチ学会

〒 113-0032 東京都文京区弥生 2-4-16

学会センタービル 3F

E-mail: jimukyoku@orsj.or.jp

Tel: 03-3815-3351（代）, Fax: 03-3815-3352

URL: <http://www.ise.chuo-u.ac.jp/or2006s/sympo55/sympo1.html>

## &lt;チュートリアル・セミナー等&gt;

## ☆ 平成 17 年度統計数理研究所公開講座

日 時：2005 年 9 月～2006 年 3 月

会 場：いずれも統計数理研究所講堂

講座名と日程は：

※申し込み締め切りが 12 月 1 日以降の講座のみ再掲。詳細は前号参照。

※下記の表示は、順に講座名[講座種類]、開講期間、受講申し込み締め切り日、受講料、を表します。

※[ ]内は講座の性質を表すレベル表示で、統計数理概論・要論・特論の 3 種類があります。

J. 分子系統樹推定の理論と実践[統計数理要論], 2006 年 1 月 19 日（木）～20 日（金）10:00～16:00, 12 月 9 日（金）, 5,000 円

K. R によるリスク発現確率分析の基礎[統計数理概論], 2006 年 1 月 30 日（月）～31 日（火）10:00～16:00, 12 月 23 日（金）, 5,000 円

M. 計数データに対する非ポアソン回帰モデル[統計数理要論], 2006 年 2 月 17 日（金）10:00～17:00, 1 月 13 日（金）, 3,000 円

N. Packing and random packing [統計数理特論], 2006 年 2 月 27 日（月）～28 日（火）10:00～16:00, 1 月 27 日（金）, 5,000 円

P. 時系列解析入門[統計数理概論], 2006 年 3 月 9 日（木）～10 日（金）10:00～16:00, 2 月 3 日（金）, 5,000 円

受講申し込み方法：往復葉書により申し込み。返信葉書による受講証の送付を待って受付を確認の後、各受講料納入期日までに受講証で指定した銀行口座に振り込み。詳細は、下記照会先ホームページ等で確認のこと。

照会先：〒 106-8569 東京都港区南麻布 4-6-7

大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構  
統計数理研究所 公開講座係

Tel: 03-3446-1501（代）, Fax: 03-5421-8720

E-mail: [edu-info@ssiws.ism.ac.jp](mailto:edu-info@ssiws.ism.ac.jp)URL: <http://www.ism.ac.jp/lectures/kouza.html>

## 公募・求人情報

本コーナーでは計量的手法や社会調査、統計学と関係が深いと思われる公募を中心に、公募情報を抜粋して紹介します。以下の公募は、応募期限の早い順に並んでいます。公募情報の詳細については、公募元にご確認下さい。

なお、研究者の公募情報は、例えば独立行政法人科学技術振興機構の「研究者人材データベース（JREC-IN）」で参照することができます。URL は下記の通りです。ご活用をお勧めします。

<http://jrecin.jst.go.jp/>

以下には上記 JREC-IN に含まれていない公募情報も掲載されている場合があります。原則として、本学会に直接広報依頼のあった公募については詳細に情報を記載します。

## ☆ 独立行政法人 大学入試センター研究開発部

1. 募集人員：教授（独立行政法人大学入試センター教育職俸給表適用）1 名

2. 所属研究部門：試験基盤設計研究部門

[注] 大学入試センター研究開発部では、大学入学選抜の改善に資する基礎的・応用的研究を行っている。現在、専任教官は 4 研究部門のいずれかに所属しているが、平成 18 年 4 月に、研究部門を大学入試センター試験の業務の流れに沿った 2 部門（試験基盤設計研究部門、試験技術基盤研究部門）に改組する予定である。

3. 求める研究・業務内容：

当該研究部門では、大学入試センター試験に係わる情報収集、試験制度、試験方法改善、作題関連等の研究を行う。特に本公募職種については、解答過程の分析等の試験問題の作成に係わる調査研究を行うこと及び作題関連の管理運営業務を中心に担うことを重要任務とする。また平成 18 年度からは、本部門が主たる担当部門となつてプロジェクト研究「新しい枠組みの総合試験」が開始される予定であり、そのプロジェクトに責任者として参画することも任務とする。

4. 応募資格：

- (1) 試験問題の作成に関連した研究経験を有する者
- (2) 統計的データ解析・標本調査・情報処理に必要な専門的知識を有する者
- (3) 研究プロジェクト等の管理運営業務の経験を有する者
- (4) 博士の学位を有する者、又はそれと同等の研究業績を有する者

5. 定年及び任期：
 

独立行政法人大学入試センター就業規則等の定めるところにより、定年及び任期がある。

[注] この任期は、大学の教員等の任期に関する法律（平成9年法律第82号）に基づくものではない。
6. 応募に必要な書類：
  - (1) 履歴書（写真貼付、学歴・職歴等詳細に記入のこと）
  - (2) 研究業績等一覧（論文、総説（報告書を含む）、著書、翻訳等を区分し、題名・発表雑誌名・発表年を明記すること）
  - (3) 主要な論文、著書、又はその写し5編程度（各1部、後日返却）
  - (4) 大学入試についての研究上の関心、「4. 応募資格、(1)～(3)」の各項に関する経験及び今後の抱負等について応募者が記した文章（字数：2000字程度）
  - (5) 本人の業績等について問い合わせのできる方（2人まで）の氏名、連絡先、応募者との関係
7. 応募締切日：平成 17 年 12 月 20 日（火）必着
8. 採用予定日：
 

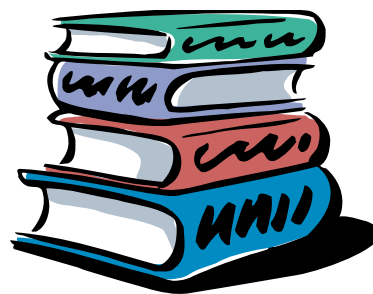
平成 18 年 4 月 1 日以降のできるだけ早い時期
9. 問合せ先：独立行政法人大学入試センター  
研究開発部長 田栗正章  
Tel: 03-5478-1277, E-mail: taguri@rd.dnc.ac.jp
10. 応募書類提出要領：
  - (1) 提出先：〒 153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23  
大学入試センター管理部総務課長
  - (2) 厳封の上、「試験基盤設計研究部門教授応募書類在中」と朱書きすること
  - (3) 郵送の場合には、簡易書留とすること

#### ☆ 新潟大学医歯学系

1. 募集人員：教授 1 名
2. 所属：医歯学系保健学系列看護学専攻
3. 担当授業科目
 

学部：卒業研究、医療統計、環境と健康、疫学等  
大学院：医療情報統計科学、国際医療保健学概論等
4. 着任時期：2006 年 4 月 1 日
5. 公募締切：2006 年 1 月 4 日 17:00 必着
6. 照会先：
 

〒 951-8518 新潟県新潟市旭町通 2 番 746 番地  
新潟大学医歯学系保健学系列 藤野邦夫  
E-mail: fujino@clg.niigata-u.ac.jp  
Tel & Fax: 025-227-2362



#### 会員の著書等

- ☆ 原 純輔『社会調査』放送大学教育振興会，2005 年。
- ☆ 広田すみれ『読む統計学 使う統計学』慶應義塾大学出版会，2005 年。
- ☆ 猪口 孝 他『アジア・バロメーター 都市部の価値観と生活スタイル—アジア世論調査(2003)の分析と資料』明石書店，2005 年。
- ☆ 猪口 孝 他（編）『国際政治事典』弘文堂，2005 年。
- ☆ 猪口 孝『アジア学術共同体 構想と構築』NTT 出版，2005 年。
- ☆ 村上征勝『シェークスピアは誰ですか？—計量文献学の世界』（文春新書）文藝春秋，2004 年。
- ☆ 永田 靖・今 嗣雄・山田 秀・稲葉太一・葛谷和義『おはなし統計的方法—“早わかり”と“理解が深まる 18 話”』日本規格協会，2005 年。
- ☆ 小野寺孝義・菱村豊『文科系学生のための新統計学』ナカニシヤ出版，2005 年。
- ☆ 佐藤嘉倫・平松 闊『ネットワーク・ダイナミクス—社会ネットワークと合理的選択』（数理社会学シリーズ）勁草書房，2005 年。
- ☆ 先端社会研究編集委員会『先端社会研究〈第2号〉特集 社会調査の社会学』関西学院大学出版会，2005 年。
- ☆ 竹内光悦・元治恵子・山口和範『図解入門ビジネス アンケート調査とデータ解析の仕組みがよくわかる本—社会調査のためのデータの集め方と統計解析入門』秀和システム，2005 年。
- ☆ 土屋隆裕『社会教育調査ハンドブック』文憲堂，2005 年。
- ☆ 朝野熙彦・鈴木督久・小島隆矢『入門 共分散構造分析の実際』講談社，2005 年。



## 学会誌論文投稿先

学会で発表された研究などを、できるだけ論文として投稿してください。お待ちしております。

### 和文誌「行動計量学」

和文誌編集委員会では、審査プロセスの迅速化、省力化のため、今後、以下の方針で作業を進めたいと思っていますので、ご協力ください。

例えば、投稿論文の審査プロセスの迅速化を念頭におき、投稿者は編集委員会へ論文のハードコピーを4部提出することになっていたが、ハードコピー（少なくとも1セット）を郵送するとともにPCファイル（できればword形式）を電子メールに添えつけ提出することに御協力願います。審査過程も、メールの活用で迅速化したいと思っています。

投稿論文の内容の審査に関しては、重要な点に関して明白な数学的誤謬があったり、多重投稿やアイデアの優先権や著作権に問題がない限り、多少粗削りでも、どこかに時代の先端を切り拓く研究発展への萌芽を持っているものを歓迎したいと思います。また、新たなデータ採集や方法論の報告だけでなく、現状の広義の統計関連分野を批判して、新しい時代へ導く木鐸を鳴らす檄文も歓迎いたします。

#### 論文送付先

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7  
文部科学省統計数理研究所内  
「行動計量学」編集委員長 吉野諒三  
e-mail: yoshino@ism.ac.jp

### 欧文誌「Behaviormetrika」

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1  
東京大学大学院総合文化研究科生命環境科学系  
欧文誌編集委員長  
繁樹算男  
kshige@bayes.c.u-tokyo.ac.jp



## 日本行動計量学会 Web ページ

<http://www.soc.nii.ac.jp/bsj/index.html>

## 春の合宿セミナー Web ページ

<http://www.cis.doshisha.ac.jp/stat/bsj06/>

## 日本行動計量学会会員数

(2005年10月4日現在)

|      |       |
|------|-------|
| 正会員  | 1030名 |
| 準会員  | 97名   |
| 名誉会員 | 8名    |
| 賛助会員 | 18社   |

## 入会手続き

学会では新入会員を広く募っています。詳しくは、下記までお問い合わせください。

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-4-19  
(株) 国際文献印刷社内  
日本行動計量学会係

電話：03-5389-6209  
FAX：03-3368-2822  
E-mail: bsj-post@bunken.co.jp  
担当：貞明靖教（さだみょう・やすのり）

## 編集後記

恒例となりました春の合宿セミナーですが、今年度は同志社大学で開催されることになりました。特に、若手の研究者の皆様、ふるってご参加ください。

今号を作成するにあたり、会員の方々から、いろいろな情報をいただきました。会員の方が出版された著書や、関連学会の大会、シンポジウムの案内など、会報に掲載すべき記事がございましたら、ぜひとも情報をお寄せください。（もちろん、ご本人の関係される大会や著書でもかまいません。）

## 会報原稿送付先

皆様からの情報をお待ちしております。  
〒274-8510 千葉県船橋市三山2-2-1  
東邦大学理学部情報科学科  
菊地賢一 kikuchi@is.sci.toho-u.ac.jp  
TEL & FAX: 047-472-1182

題字：林知己夫

会報作成担当：菊地賢一・前田忠彦・西山悦子